

「縮図」について

佐田美子

一
 浜子夫人の死後、秋声には、夫人との地味な日常生活とは違った新しい生活が訪れた。秋声はすでに老境に入っていたが、ダンス場や花柳界に出入りするようになり、それまでの作品に見られた「家庭の臭み」を問題にする必要はなくなった。そして「茶の間文学」とよばれたものは「愛欲小説」に変わっていった。ところが、さらにそれは「芸者小説」といわれたものに移っていった。

「愛欲小説」（「仮装人物」等）の女主人公は山田順子という女弟子であったが、秋声は子供達の気持や、世間の手前を考えて、彼女との関係を絶ちきった。そのあとに出現したのが「芸者小説」の女主人公小林政子であった。政子は富弥という白山の芸妓であった。この政子をモデルとして、「政子もの」と呼ばれる一連の作品と秋声最後の作品「縮図」が書かれたのである。

「縮図」は都新聞に、昭和十六年六月二十八日から連載され、九月十五日、八十回をもって中断された未完の長篇である。未発表の八十回と八十二回を加えて一冊にまとめて刊行されたのは、秋声の死後二年、昭和二十年十一月のことであった。

いた。立ちなほるのが物憂くなつて、死を思ふやうな化しさが、ひしひしと迫つて来るやうなことは不思議ではなくなつて来た。

秋声は、彼が自然主義作家として筆をとつて以来、多少のフィクションはあつても、彼自身の生活を描くことをもつて、彼自身の本領としていた。しかし、はじめは、自分の日常生活をほそぼそと書いていたのが、気骨が折れなくなつていよいよ、イージーゴーイングな気持に任じていたのであるが、やがて「私小説」のもつ自己追求の眞実を体得し、そこに文学の「莊嚴」——昌すべからざる絶対的価値を見出したのであった。そこに、「縮図」の執筆を中断する確固たるものを見せ得たのである。

もう一つこの中断の決意に関わるものがあるとすると、それは秋声がその女主人公に抱いていた愛情の眞実にあると思う。

「縮図」は多少の小説的粉飾と仮構的な要素をも混淆してはいるが、凡そ主人公三村均平と銀子とは、秋声と小林政子におきかえて差支えないと思う。しかし、均平は秋声であるか、徳田末雄であるかといふことは、やはりこの場合顧慮する必要があるようである。つまり秋声と政子とを描き出す筆者は、徳田秋声であり、描かれる方は徳田末雄であつたといふことが言えるのではないかと思う。

「銀子」は、芸者の社会に生きる「女」であるが、秋声は「銀子」を典型的な「芸者」としては描いていない。「普通の女が芸者を稼業としてあるだけのもの」として描いているのであつて、この描写法は「自然主義的特色」であると正宗白鳥氏は述べている。秋声はその特色を十分に發揮したのである。芸者であつてそういう特別の扱いをしない。そこに生地人間が現わされたのである。芸者であ

「縮図」について

新聞掲載に當つて彼は次のような作者の言葉述べている。
 此新しい文学の方嚮を見出すことも出来ないでゐる私が物を書くことも何うかと思ふが、都新聞の作品への注文が、商売意識を離れた芸術本位なもので、私にも多少の感激があり、時代の許す範囲で自由に書きたいと思ふ。
 このやうな彼の抱負も、戦争の激化とともに、当局の弾圧のもとに崩れさらねばならなかつた。彼は当局の意向と「妥協すれば腑抜けになる。遽かに立場を崩す訳にも行かないから、この際潔く筆を絶たう」と思った。このやうな国家権力による圧迫にも妥協しなかつた彼の心魂に、小説に対する深い信念が横たわつていたことは想像に難くないのであるが、それは一口に言つて「自然主義の莊嚴さ」にあつたと言えよう。彼は「一つの好み」（昭和九年四月「中央公論」）の中で次のように言つてゐる。

彼は彼自身のぼろぼろになつた自然主義から建直さなければならなかつた。この頃になつて漸と自然主義の莊嚴さにふれかけて来たやうな気はするものの、もともと鈍根だから焦燥に駆られる気持の苦しさといふものはなかつた。彼は屢々絶望的な溜息をつる銀子の「あるがまゝ」の人間性が出現したのである。このことは「黴」や「仮装人物」その他の女主人公についてもいえることである。女主人公の愛情の相手が作者たる主人公一人ではなく、二人から三人といふように移つてゐる点では、「黴」の「お銀」が娼婦でなくともそれに近いものがあつた。例えば「仮装人物」では、女主人公の葉子は体を庸三にまかせながら、遠くにいる夫のもとへ、「懐がさびしくなると性急に電報を替など、金を取り寄せる」のであり、そのためには夫が「満足するやうな、いくらか艶っぽいことも書かなければならない」のである。しかも、「わざと庸三の目の前で、達筆に書いて見せる」のであつた。それからホテルに來てゐる夫の秋本を訪ねてきたあと庸三と共に觀劇する時、「さういふ時に限つて、彼女はまた別の肉体に愛情を感じると見えて、傍の目が一斉に舞台に集まつてゐるなかで、その手が庸三にそつと触れて來るのであつた。」岩永氏は、こうした点について、「葉子の行為が形式の上から見て売春であることは疑いを容れないのみでなく、そこに一種の変態的な興奮を感じていることも勿論である。」と見る。

秋声は、娼婦には、普通の女と変らぬものを持たせ、普通の女には娼婦的な面を持たせた描写をする。岩永氏はこれを虚無的な發想法とよんでいる。そして、それは多分に秋声の生き方の問題にかかわつてゐるやうである。つまり、「家庭の父としての恐ろしく打算的な秋声が、その性態や名譽慾や物慾を同時に充足し、矛盾にたえて生きる方法として、虚無的な發想法を媒介としたことは、社会の矛盾を現実的に統一するための闘いを放棄した場合には、必然的に生起する現象であり、それは藤村、花袋その他の日本自然主義の基礎

となつてゐるものである。(中略)彼は世俗的に性慾も名譽慾も、また家庭の父としての立場も明瞭に自覚してゐたと共に、これらの矛盾に対する苦惱と現実的な規範への躊躇から解放された世界に移行するための憧憬と情熱とを燃したのである。彼は現実的な矛盾から脱却の可能性を虚無的な文学的發想法のうちに見出した」と岩永氏は述べてゐる。

「縮図」においても、その一連の短篇においても、銀子と三村均平との生活を写し描いたに過ぎず、その生活は「くまぐま」と或は修飾し、或は変えながら、兎に角も矛盾だらけの生活の種々相に堪えて生き抜いて来た力に基いて築きあげられた小説なのである。そうして、「あるがまゝ」を「なるがまゝ」に生きたその姿を描きあげ、肯定されたものに順応して行く人間の姿が示されたのである。そこには矛盾した人間関係もあり、愛情もあり、打算も裏切りもあるのであるが、それら一切のものを肯定して生き抜く人間の姿があり、強い作家のエゴイズムも働いてゐる。これらを岩永氏は「弾力性」という言葉で表現し、その「弾力性が重要」だと言つてゐる。つまり、秋声の場合には、この「弾力性」がその文学に特色を作つてゐるのである。「縮図」の特長もこの「弾力性」にあるといつてよい。そこで作者秋声の持つ弾力性を示すべき相手役をつとめるのが、「縮図」の女主人公「銀子」であつた。

二

「銀子」とは、富弥といわれる白山芸妓がモデルであることは疑いない。富弥は本名を小林政子と言ひ、「死に親しむ」(昭和八年刊)以来諸篇に登場するが、明治三十七年上州に生れ、六人姉妹の長女

彼女は既に二度ばかり彼の書齋へ来てゐた。(中略)庸三は家の人の手前ちよと照れた。しかし、二度目に来た時は、やっぱり愛らしかった。誰の目にも商売人とは思えないやうなところがあつた。⁽⁵⁾

ふらりふらり水のうへに咲いた花のやうに働いてゐた正子も、五月の初めには、悉皆庸三のものになつてゐた。彼は今更らながら、不安を感じはしたものの、愛するもの、一人もない時の心の弛びも思はれた。いづれ執かに決定しなければならぬことだつたが持つとすれば彼女などは悪くはなかつた。

庸三は曾つての恋愛事件が非難の高かつたその反動もいくらかあるらしく思へたので、その恩寵に甘えてはならないことも感じてゐたけれど、彼の目がさう過つてゐなかつたことも、漸次にわかつて来た。⁽⁶⁾

このように秋声は銀子に愛情を持つてゐた。それは、「愛らしさ」という程度のものであつて、強い光を射るのではなく、淡い感じの言葉で表現されてゐるのである。「愛らしさ」銀子を見る目は、芸者の彼女を「芸者らしくなく」し、「芸者色にもなつてゐない」で、「芸者があることを嫌う」女にする。そして「先生は、芸者扱ひしなからいゝ」と銀子に自分の態度を云わせることもあつた。銀子を一個の女性として扱うのにも、庶民の女性を素材として作品を作りあげた文学態度が、そこに現わされてゐるとも言える。銀子を愛らしく思いつゝ、子供達に気がねしてまでつゞける二人の生活であつても、「何処までも用心深い」ものがあつた。そこには打算があつた。均平——秋声自身にも打算の存在してゐることはわかつてゐた

「縮図」について

である。「政子が生れたばかりのころに一家は上京し、下町を転々と移つて、柳原で靴屋を始めた。父の不慮の災難がもとで家は窮迫におちいり、靴職人にならうとしていた政子も千葉の花街に売られ、彼女の芸者生活が始まる」のだが、これは、「縮図」の中の「銀子」のものと同じで、フィクションは施されていない。「秋声と略同年の従姉が、彼女達の父の家計が不如意であつたために、しばしばその身を売つてゐたという事実があつた」という説があるが、これは、「銀子」に結びつくやうに思われる。「重五郎(叔父)の娘「銀」については、秋声は、自伝、或はその類の作品には何も記してはゐない。しかし、私には「縮図」の「銀子」がこれと結びつけられるやうな気がしてならないのである。勿論「縮図」は彼が彼の晩年その身辺にいた一女性の半生を中心として描いたものといわれ、その原型は「一つの好み」の中に見出されるのであるが、「縮図」は彼の近親の中にかうした娘のあつたことが強く意識せられていた結果出来たのではないかと考えるのである」といふ。秋声の父雲平の弟重五郎の娘「銀」は、彼の家系に実在して居り、「銀」が身を売つた事実もある。しかし、「縮図」の中の「銀子」の生活は、あくまで小林政子の生活であつて、重五郎の娘「銀」の生活ではない。たゞ、彼女の名前「銀」と「縮図」の女主人公「銀子」との関係は多少考えられる。それは「銀子」は芸者であり、娼婦と云ひ得るが、それを「普通の女が芸者を稼業」としてゐるやうに秋声を描き得た一つの理由として、この「銀」を意識してゐたことをあげ得るということである。「普通の女が芸者を稼業としてゐる」という印象は、秋声の政子に対する見方ないしは愛情からも起因してゐる。

であろうが、それには体が弱いことや金銭的援助が充分に出来ないことを理由にして、表面から打算の存在を打消してゐた。「愛情」と「打算」が相戦う適地がそこには繰りひろげられてゐる。「芸者」にならうとする銀子に向つて、「やれるかね」と言葉をかけながら、「私、此の商売を止めようか」と言われて、「彼女にはその仕事以外に他に出来るものがないから」「止めない方がよいよ」と言うのである。「彼女達の身のうへ」の中で男主人公粟田は、彼女が芸者になる時の模様を、

厭な思ひがしたものの、肩が安まるやうな気がしたと言つてゐる。銀子を芸者に出して、「肩が安まるやうな気」はするものゝ、厭な思ひもしたのである。均平は、その心を決しかねてゐた。勿論、均平にそれ相当の働きがあれば何も云うことはないが、そんなものは全然なく、屢々金銭的無能力の為に引き下つてゐる事があつた。均平の気持には、矛盾があり、それが大きく広がり、發展して、作家の生き方の基調をなしてゐる。⁽⁷⁾エゴイズムとなり、銀子と共同的に生活するのではなく、彼女を芸者にして、そこから吸収しようとしてゐた。

庸三もいくらかお座敷へ出しておく時の厭な気持が考へられたけれど、自分にも分明したことはよく解らなかつた。そんなにして家をもたして自分のものにしたところ、悉皆足を洗はない限りどうなるものともわからないので心配でもあつた。「未練の出るほどの金を注ぎこめる訳もなかつたので何か恥しかった。それに今更ら引込みもつかなかつたし、さう先きの先きまで考へて見ても仕方

がなかった。基礎工事に役立っただけでも可かった。それよりも彼は生活の分裂を怖れた。女もあって悪くはなかったけれど、書齋に落ち着かせてくれるものが、欲しかったのであった。秋声の気持の上に大きな矛盾の波が寄せていた。銀子が均平以外の男の処へ行く事を厭やだと思いつながらも、未練の出るほど金が出せないで引き下る秋声の態度を広津氏は、「慈悲心の微光がこの作物をほのぼのとした美しさに包んでいる」と言っている。つまり、銀子を束縛せず、芸者扱いしないことが「慈悲心」に通ずるものであると思われるが、「慈悲心」以前に私声のエゴイズムが生まれていたのではないだろうか。

三

秋声が白山の芸妓富弥と知り合ったのは、昭和六年で、政子が二十八才、私声は六十一才であった。富田家と云う屋号を以て置屋を開業したのが昭和八年十二月（白山三業株式会社記録）である。富田家とは富弥と徳田とを結んだもので、「縮図」の中で「松の屋」というのが、富弥が看板を借りていた家の富島家なのである。当時の女主人は片山智恵子であり、主人は長島信英と言った。

銀子が初めて不断着のまゝ、均平の屋敷を訪れた時、彼女は看板をかりていた家の、若い女主人と一緒にあった。

女主人は誕生を迎えて間もない乳呑児を抱いていた

この乳呑児は、昭和五年七月二十五日生の長男伸博であり、女主人品子の姉として描かれているのが小菊で、片山富とい、芸名は長島の一文字をとり「お長」といったと伝えられている。彼女は、大正十三年三月十三日午前五時指ヶ谷町の自宅で死去した事になっているが、

これは自殺であり、「縮図」には、彼女が自決したのは、それから一月とたぬうちであった。自決の模様については、噂が区區で、薬品だともいへば、刃物だとも言ひ、房州通ひの蒸気船から海へ飛びこんだなどともいはれ、確実なことは不思議に誰にも判らなかつた。

と書かれている。この小菊の悲劇は、花柳界の中の女達が必然的に起すことで、「出先の顔も立てなければならぬはめに陥る」のであるが、それが生活のためであっても、「神経的な松島の目は鋭く働きはじめた」のであり、更に松島と品子との関係を引き起すことになった結果、小菊の悲劇が生まれたのである。この「経済的要求と人間的要求との混淆は、人間自体を複雑きわまりない渦巻の中にまき込んで行く。この渦巻からの脱却は、二つの矛盾した要求を統一する外に方法がない。秋声の自然主義はこの渦巻に対決して、それを統一するものではない」と岩永氏は言っている。こゝに秋声文学の特色があり、彼は決して解決するのではなく、そこに生きる姿を描くのである。銀子が芸者を嫌っていても、そこからの脱却を考えさせ、実行させるのではなく、芸者の世界の中で生きる姿が描かれている。芸者としての銀子は決して「格の高い」芸妓ではなかつた。

岩谷は或大政の幹事長であり、銀行がこの土地で出た三日目に呼ばれずと統いていた客であった。議会の開期中彼は駿河台に宿を取っていたが、この土地の宿坊にも著替や書類や尺八などもおいてあり、そこから議会へ通うこともあれば、銀子は岩谷に呼ばれて方々遠出をつけてもらっていたが、分の芸者なので、丸抱えほど縛られてもいず、玉代にいくらか融通を利かすことも、

二度に一度はしていた（縮図）

岩谷とは、政友会幹事長岩崎勲がモデルである。銀子は、この岩崎と対等の場で話しているようであるが、実際はそうはでなかつた。

当時の白山見番の役員であり、全国芸妓娼婦置屋同盟会長、島田豊三氏によると、富弥は芸妓としての試験には及第していないと言われ、靴職人と遊芸とは両立する筈がなく、岩崎と対等に話し、「玉代にいくらか融通を利かす」ことは考えられない。さらに、「松島遊廓で移転問題で取崩事件が起つたでせう。そしてあの男は、ピストルで死んだでせう」と云う「縮図」の一文は、違っている。岩崎は、昭和二年一月十八日腎臓炎に尿毒症を併発して死去したのであつて、「一種の『悶死』として非常な同情が寄せられていた」と読売新聞は伝えている。「松島遊廓事件そのものは、遊廓移転そのものの、社会的な必要性があつたことに土地会社と利権屋が目をつけ、それを各政党の幹部に運動したことに始まる」ので、「均平も新聞で其の顔を見た覚えはあるが、あの時代の政界を濁してゐた利権屋の悲劇の一つである。事件の経緯は知らなかつた」と云っている。

この岩崎と銀子の関係は、岩崎と富弥との関係をもとにしたものであるが、その間には事実と大きな差がある。「秋声が見ているのは、白山の場末の芸者の口を通しての大政の幹事長であり、それはあまりにも他愛のない批評であつて、政治と人間関係に対する認識の低さを遺憾なく示しているといえるだろう。（中略）これは秋声の尾端をつけた小説的な虚構であり、如何にも事実らしく見せかけてはあるが、古い戯作の技法である」と岩永氏は述べている。銀子の父母の描写にも事実と違つたものがあり、フィクションがある。だ

「縮図」について

が虚構でなく、事実を描いた、置屋の玄関脇の三疊で校正をするとか、「三村家の三女と結婚する因縁ともなり、別家の養子となる機縁ともなつた」が、「家附娘以上の妻の郁子が同じ病気で死んで行つてから主柱が倒れたやうに家庭がごたつきはじめ（中略）彼も素直な感情で子供に對することが出来なくなり、子供達も心の寄り場を失つて、感傷的になりがちで、長男均一との不和が心配されたり、子供と一緒に小さい借家にあつたので、自然隻方（銀子のいる処）を往来することに成り、置屋と遠くないところに自宅があつたり、「銀子も商売を始めない以前の一年ばかり、こゝからずつと奥の方にあつた均平の家へ入りこんでゐたこともあつて、子供もあつただけに、もっと厭な思ひをしたのであつた」そして、家庭不和のため飛び出したりする辺りは、秋声と富弥との関係を描いたものである。置屋開業にあたり、幾許かの手持と母の臍線とを纏めて株を買ひ、思つても見なかつたこの商売に取りついたのであつた」と資金出所について書いているが、これは秋声自身の出資もあり、「機微の間になると、虚実混淆を以て小説が作られて」と断定して良いと思ふ」と岩永氏は論じている。

四

その頃には世の中もかはつてゐた。放漫な財政の破綻もあつて、財界に恐慌が襲ひ来り、時の政治家によって財政緊縮が叫ばれ、国防費がひどく切り詰められた。

と当時の社会情勢が処々に書き加えられているが、均平達が生きた社会はどんなものか云う説明であつて、均平や銀子には、直接関係はなかつた。世の中がどんなに変つても、均平と銀子の生活は変

わらなかつた。その社会情勢への抵抗も不満も、賛成も何も見られず、社会変化に関係なく、二人は生きていた。財政緊縮が叫ばれ、国防費が切り詰められたと云う社会で生きた人間像が、「縮図」の中にあつたので、秋声の云う、社会は、人生であり、銀子の生きて来た道程が社会であり、人生なのである。「大きな内容として発見した『社会』といふものは、秋声の人生のなかには全く含まれていない」と塩田氏は云っている。「縮図」で、秋声は、社会を捉えたのではなく、銀子の生きた人生を写したのである。

「秋声文学のもっている力は、たしかに社会そのものを感じさせると、それは庶民の女が典型にまで描きあげられたところから生まれている」と井村氏は論じているが、こゝで云う「社会そのもの」とは何か疑問である。「庶民女のが典型にまで描きあげられた」とあるから、やはり銀子の生きた社会であり、庶民社会が「そのまゝを感じさせる」のである。広い意味の社会ではない筈である。

その銀子の社会に、秋声も共に生き、共に生活して、自分の目で見、足で歩いた道を筆にしたので、その中に生きた人間は、血が通つていた。

銀子という一人の女性の生理と心理と運命そのものをよりどころとして扱えられた人生の縮図であつた。

と日本文学辞典は記しているように、銀子の人間像が刻まれている。彼女は芸者として生きた姿から、置屋の女主人となり、嫌いな人であっても、客であれば味気なくも出来ず、愛する人であっても身分がどうのと言われて、後に引き下り、愛人の結婚式の新聞記事を読んで、悲しみを苦むのである。そして、置屋を住替つて、悲しい思

しむが、均平は、それを一步離れたところから眺め、時々、彼女と歩調を合わせても、「本の線となることはなかつた。それは終始、「縮図」が銀子の人生を「写した」のであつて、銀子の生活向上を考え、その方向へ導くことはなかつた。彼女の人生も、秋声によって定められたもので、作者秋声のひいた白線の上を、間違ひなく歩いたに過ぎないのである。作者は、三村均平となつて銀子の前に出て、彼女の愛人ともなれば、妻と子供を持った一家の主となり、文学者となれば、置屋を経営する主ともなるので、自己のエゴイズムから、銀子を自由にあやつり、愛情と打算の矛盾から、銀子との間をせばめたり、間隔をつくつたり、秋声文学に登場する一人の新しい型の女性として、その存在が残されたのである。強い力をもつた秋声のエゴイズムは、広津氏から「慈悲心」と云われる迄になり、銀子の上に大きく被さつた。「慈悲心」的エゴイズムを動かす絶好の場所が、「縮図」の中にあつた。そして、その相手役として、もつとも適していたのが銀子であり、「儼」の「お銀」のモデル浜子夫人や、「仮装人物」の「葉子」のモデル山田順子等よりは、秋声にとって、もつとも良い相手だつた筈である。浜子夫人は、秋声の妻であり、山田順子は文学の女弟子であつたが、「銀子」はそん

い出のある土地から遠ざかることで自分を慰め、「あの物哀しい土地から足をぬいたことは、何といつても気持がよかつた」と負け惜しみを言わなければならない哀れな女の姿を描いた。読書を禁じられ、食事は少ない目にするのが良いのだと云われ、病気をした時の苛酷な扱ひもあり、一口に芸者と言っても、その苦勞は多いのであるが、逆に置屋の女主人となると、「抱へが生半可に本なぞ読むのは、この道場の禁物であり、一頃流行つた救世軍の、あの私刑にも似た暴挙が、業者に恐慌を来してゐた時代には、うっかり新聞も抱への目先へ抛り出しておけないのであつた。法律で保護されてゐてゐないやうな状態におかれてゐた時代は永く続き、悪柱庵にかゝり、芸者に喰はれても泣寝入が落ととなりがちな弱い稼業でもあつた」といつて、置屋開業の苦痛を述べ、短篇「チビの魂」では、その時の苦勞の有様を描いている。置屋経営の苦勞は、銀子にもあつたが、均平つまり、秋声自身の身に浸みた苦勞が想像されるのである。

こうした苦痛は、銀子には一度や二度のものではなかつたが、彼女は、それに完全に立ち向つて抵抗したのではなかつた。病気で倒れて、熱にかきされて言う浮言か、住替をする位が、抵抗であつて、芸者は嫌いだと言ひながら、続けなければならなかつたということとは、やはりそこに生活があつたので、銀子には、生活のための手段であつたと言つてもよい。親や、妹達の為には、嫌ひでもやめる事は出来ず、「あらくれ」の「お島」とは違つた意味で生活力を持つていたと言える。金銭的打算から、栗栖、磁貝、倉持と渡り歩き、木元との結婚生活も長くなく、「芸者」という一種の職業について、三村均平と知り合うのだった。生きるために「芸者」として働き、苦

な重苦しい間柄はなかつたことからしても、秋声に適していたと言えるのである。

註1 正宗白鳥「自然主義文学盛衰史」(角川文庫)

2 岩永胖「秋声『縮図』の研究」(『明治大正文学研究』第二十一号所収)

3 「国文学解釈と鑑賞」昭和27年5月

註4 「秋声年譜」(『文学・語学』第五号)

5 「一つの好み」

6 「縮図」

7 昭和十年一月「改造」発表

8 広津和郎「徳田秋声論」

9 千葉泉佐倉弥勤町一四七番地出身

10 「松の家」の主人

11 塩田良平「概観明治文学」

12 井村紹快「あらくれ」から『縮図』へ(『文学』昭和28年

5月号)

13 「日本文学辞典」(学生社版)